

IV-50

ふるさとの景観の認識特性について

秋田大学 学生員 ○吉田 史子
秋田大学 正 員 清水浩志郎
秋田大学 正 員 木村 一裕

1. はじめに

近年地方部では、生活の利便性を追求した施設整備による都市化が進行し、本来備えられているはずのアメニティ要素（自然のままの景観等）が、減少傾向にあるといわれている。このような現状から、平成5年10月より、秋田県でも「景観を守る条例」が施行された。これは農山漁村の風景や文化的景観などを「ふるさと景観」と位置づけた保全方策である。

そこで本研究では、保全に関する基礎資料に資するため、都市住民と県内住民を対象として、「ふるさと景観」に関する意識の分析を試みる。

2. 評価実験の概要

(1) 調査方法

本研究では、「ふるさと景観」に対する人々のイメージを把握するために、SD法を用いたアンケートによる意識調査を行った。調査に用いた評価因子を表1に示している。

表1 SD評価因子

NO	形容詞対	NO	形容詞対
P1	すき - きらい	P9	調和している - 調和していない
P2	機能的である - 機能的でない	P10	本物っぽい - つくりもののっぽい
P3	このままでよい - 改良すべき	P11	親しみやすい - よそよそしい
P4	広々とした - 窮屈な	P12	力強い - 弱々しい
P5	歴史や文化を感じる - 感じない	P13	緑の多い - 緑の少ない
P6	整然とした - 雑然とした	P14	にぎやかな - さみしい
P7	昔ながらの - 変わりばえのない	P15	あたたかい感じ - 冷たい感じ
P8	時間がゆっくり - してない	P16	なつかしい - なつかしくない
	自然にやさしい - やさしくない	P17	ほっとする - 落ち着かない

(2) 対象景観および被験者

調査票で用いた景観の写真は、秋田県内で任意に撮影した18枚である（表2）。

表2 写真の構成

NO	写真の種類	NO	写真の種類	NO	写真の種類
①	都市公園1	⑦	並木道1	⑬	農村風景1
②	都市公園2	⑧	並木道2	⑭	農村風景2
③	児童公園	⑨	野菜売場	⑮	かやぶき
④	自然公園1	⑩	農 園	⑯	水 辺 1
⑤	自然公園2	⑪	定 期 市	⑰	水 辺 2
⑥	木造校舎	⑫	畦 道	⑱	水 辺 3

被験者は、東京都および周辺在住者、秋田県在住者である。なお有効回収票はそれぞれ43票、40票であった。被験者の年齢構成は30代以下の「若年層」が都市では27%、地方では23%であり、40代以上の「高年層」は都市、地方ともに25%であった。

3. 景観評価の分析

(1) 嗜好評価について

「好き-嫌い」の評価値を用いて、下式の満足度指標を算出した。これは、+100ならば完全に満足であり、-100であれば不満であることを示している。

$$\text{満足度指標 (\%)} = \frac{(\text{好きな人数} - \text{嫌いな人数})}{(\text{好きな人数} + \text{嫌いな人数})} \times 100$$

満足度指標の地域別の差を表3に示している。

表3 満足度指標の地域別差

		地 方	
		低い	高い
都 市	低い	③	②⑤
	高い	⑧⑨⑪ ⑬⑫	①④⑥⑦⑩ ⑭⑬⑰⑱

満足度指標の差を地域別にみると、評価が共に高いものは⑥木造校舎、⑦並木道、⑭農村風景2などであり、なつかしい風景を好む傾向がみられる。都市では、⑨野菜売場、⑫畦道など地方に特有な景観が、地方では⑤自然公園2、②都市公園2といった比較的整備された景観を好む傾向がそれぞれみられた。とくに⑮かやぶきに関しては満足指標値は共に0であり意識の差が全くみられなかった。これはかやぶきが現在のアメニティ要素として認識されにくいものになってきていることを示唆するものと考えられる。以下に意識差の特徴がある写真を示している。



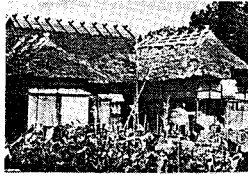
写真⑮ 自然公園2



写真⑥ 木造校舎



写真⑤ 野菜売場



写真⑥ かやぶき

(2) イメージ評価について

景観のイメージ評価について因子分析を行い、意識の構造を検討した。ここでは都市と地方で評価構造の異なる⑤自然公園2をとり上げ、その分析結果を表4に示している。

表4 因子負荷量一覧

	イメージ 評価因子	因子負荷量			イメージ 評価因子	因子負荷量	
		因子1	因子3			因子1	因子3
P1	機能的	0.133	0.302	P11	親しみ	0.775	0.119
P2	このまま	0.062	0.342	P12	力強い	-0.553	0.123
P3	広々	0.594	0.439	P13	緑の多い	0.603	0.031
P4	歴史	0.318	0.635	P14	にぎやか	-0.080	0.086
P5	豊饒	0.399	0.588	P15	あたたか	0.334	0.136
P6	昔ながら	0.024	0.585	P16	なつかし	0.521	0.266
P7	時間	0.828	0.149	P17	ほっと	0.673	0.166
P8	自然	0.730	0.325	寄与量		4.965	2.051
P9	調和	0.665	0.446	寄与率(%)		54.5%	22.5%
P10	本物	0.740	0.269	変動割合(%)		29.2%	12.1%

第1因子をみると「親しみやすい」「本物っぽい」の因子負荷量の値が高く、「このままでよい」「昔ながらの」に低い値がみられたため、整備に關する「改良-保全軸」と考えられる。第3因子は、「歴史や文化」「昔ながらの」「調和」が高いことから「文化-伝統軸」と解釈した。

第1因子(I軸)、第3因子(II軸)により構成される座標上において、年齢別に個体をプロットしたものを図2に示している。ここでは、文化軸を境に若年層と高年層で意識の差が表れている。

次に、意識構造をより解明するために嗜好の意識と各評価因子の相関関係についての検討を行った。

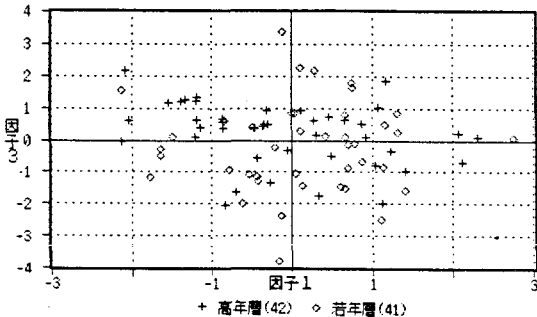


図2 個体プロット(年齢別)

嗜好意識と年齢別のイメージとの相関図を図3に示している。ここで、レーダー図のP1は表1の形容詞対のP1に対応している。

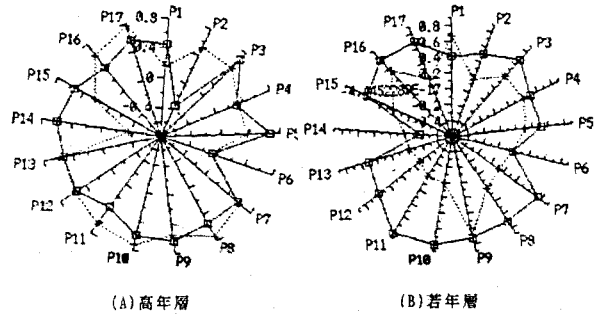


図3 嗜好と評価の相関図(⑤自然公園)

高年層ではレーダーチャートに地域差が認められないが、都市では「にぎやか」が、地方では「このままでよい」が低い値としてそれぞれ示されており、図2の「改良-保全軸」での意識の差がここにあらわれているものと考えられる。

若年層の場合には、レーダーチャートの形に著しい違いが生じた。全体的に都市の相関が低く、高年層で高かった郷愁的なイメージはすべて低いものであった。これに対して、相関では景観の持つ「機能性」「調和」が高い値となった。

4. まとめ

「ふるさと嗜好」のイメージがとくに高いものは、都市住民では木造校舎や農村風景などのなつかしい、あるいは自然のままの景観といった従来の地方でのアメニティ要素が主である。これに対して、地方住民は比較的整備された都市的なアメニティ要素を好む傾向がみられる。

年齢別の嗜好の評価構造をみると、高年層ではほぼ地域別の違いはないが、若年層では都市と地方で全く異なる構造をもつことが明らかになった。

したがって、「ふるさと景観」の保全、および整備方策としては単に機能性を追求するのではなく、周囲の景観要素との調和や連続性を考慮にいれるべきであると考えられる。また、精神面では「なつかしさ」「やすらぎ感」に加えて、「ふるさと嗜好」をはじめ、人間の意識構造の変化に対応した保全・整備方策が今後必要と考えられる。